

【国際学部】中期計画総括シート

提出日：2023年1月23日

責任者	国際学部長	担当部局	国際学部
-----	-------	------	------

1 国際学部の理念、目的、各種方針

国際学部の理念	変更の有無
国際性の涵養	有・ <input checked="" type="radio"/>
国際学部の目的	変更の有無
<p>国際学部は、「国際性の涵養」を教育・研究上の理念とし、その理念を達成するために、「国際事情に関する課題の理解と分析」を教育・研究上の目的とする。その目的の達成を通じて、「国際性」(世界理解、国際理解のための能力)と「人間性」を備えた世界市民として、国際的なビジネス・市民社会で活躍できる人材を養成する。よって本学部のモットーを「Be a world citizen who renders service to humanity.」とする。</p> <p>「国際事情に関する課題の理解と分析」という教育・研究上の目的は、学生が高い外国語能力を習得し、世界の各地域を様々な角度(特に人文・社会科学の観点)から理解し、分析できるようになることである。本学部の特色は、タテの学問領域(文化・言語、社会・ガバナンス、経済・経営)に含まれる複数のディシプリン間の相乗効果を用い、ヨコの地域別研究コース(北米研究、アジア研究)を「学際的に」教育・研究し、それによって柔軟で、幅広い視野に立った世界理解、国際理解を図るところにあり、その教育・研究全体を「国際学」と位置づける</p>	有・ <input checked="" type="radio"/>
学位授与方針(DP)	変更の有無
<p>Kwansei コンピテンシーの獲得を念頭において、国際学部のディプロマ・ポリシーを以下の通り定める。</p> <p>国際学部は、関西学院大学学則に定める本学部の人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的を達成するため、教育課程(カリキュラム)を編成・実施している。これに基づき、本学部は、学生が所定の期間在学し、教育課程上の所定の科目を修得することで、学生自身が身につけた次のような学士力を評価し、学士(国際学)の学位を授与する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 国際事情に関する課題の理解力と分析力 世界の諸地域を人文・社会科学の様々な観点から理解し、分析できる。 2) 問題発見解決能力 主体的に問題を発見し、適切な方法に基づいて問題を解決できる。 3) 異文化理解・多文化共生能力 異文化に対する感受性をもち、多様な文化と共生できる。 4) 倫理的価値 キリスト教主義に基づく「人間教育としての教養教育」を通じて「倫理的価値観」を体得している。 5) 言語コミュニケーション能力 外国語能力を生かし、積極的に発信できる。 	有・ <input checked="" type="radio"/>
教育課程の編成・実施方針(CP)	変更の有無
<p>Kwansei コンピテンシーの獲得を念頭において、国際学部のカリキュラム・ポリシーを以下の通り定める。</p> <p>国際学部は、関西学院大学学則に定める本学部の人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的を達成するため、教育課程(カリキュラム)の編成方針を以下のように定める。</p> <p>本学部の教育課程における科目区分は、キリスト教科目、言語教育科目、教養基礎科目、専門基礎科目、地域研究科目、研究演習科目、領域関連科目、自由履修科目とする。教養基礎科目は、入門的科目を第1類、基礎的科目を第2類、基礎演習科目を第3類とする。地域研究科目は、グローバル研究科目群、北米研究科目群、アジア研究科目群、ヨーロッパ研究科目群とする。</p> <p>本学部の学生は、英語、そして日本にとって物的・人的交流が盛んな主要地域で使用されている中国語・朝鮮語を第1外国語として集中的に修得する。また、世界における様々な地域には、異なった文化、言語、社会、ガバナンス、経済、経営などが存在する。本学部における「国際事情に関する課題の理解と分析」という教育・研究上の目的は、学生が各地域を様々な角度(特に人文・社会科学の観点)から学際的に理解し、分析できるようになることである。そのため、専門科目を大きく3つの領域(文化・言語、社会・ガバナンス、経済・経営)に分け、国際社会、国際事情に関する幅広い知識の習得を行う。</p> <p>異文化理解と自国文化の理解は互いに不可欠である。そのため、本学部では日本の文化・言語、社会・ガバナンス、経済・経営などに関する諸科目も開講することで、自国文化の歴史的・同年代的考察を促す。加えて、英語の運用能力を高めるため、また外国人留学生に対応するため、英語で行う授業科目を、各科目区分に配置する。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① キリスト教科目、宗教、哲学・思想、人権などに関する科目を提供し、キリスト教主義に基づく「人間教育としての教養教育」を通じて「倫理的価値観」を養う。 ② 4年間を通じてひとつの外国語を重点的に学ぶことができるカリキュラムを用意し、他の言語の学習機会も広く提供し、「言語コミュニケーション能力」を養う。また、教養基礎科目、専門基礎科目、地域研究科目に英語で行う授業科目を配置する。 ③ 海外留学によって、「異文化理解・多文化共生能力」および「言語コミュニケーション能力」を養う。海外留学としては、短期留学(約1ヶ月)、中期留学(3ヶ月～半年)、長期留学(半年～1年)の他、関連する留学プログラムを位置づける。 ④ 全専任教員は、原則として各自の研究専門領域科目とともに研究演習科目を担当し、文化・言語、社会・ガバナンス、経済・経営領域の学際的学習と、少人数教育を通じて、「問題発見解決能力」を養う。 ⑤ 文化・言語、社会・ガバナンス、経済・経営の各分野に関する基礎的な科目と国際的な科目を提供し、世界の諸地域を人文・社会科学の様々な観点から理解し分析できるようにし、「国際事情に関する課題の理解力と分析力」を養う。 	<input checked="" type="radio"/> ・無

学生の受け入れ方針(AP)	変更の有無
<p>【関西学院大学(学士課程)】(2021年度入学生)</p> <p>I. 関西学院大学アドミッション・ポリシー 世界を視野におさめ、他者(ひと)への思いやりと社会変革への気概を持ち、高い識見と倫理観を備えて自己を確立し、自らの大きな志を持って行動力を発揮する“Mastery for Service”を体現する世界市民を育成することが関西学院のミッションです。 関西学院大学は、このミッションに共感し、大学での学びや諸活動の中で、自分への挑戦をし続ける意欲にあふれ、さまざまな適性を有する多様な背景をもった学生・生徒を世界のあらゆる地域から受け入れます。 そのために、これまでに培われた確かな基礎学力、活動や経験を通じて身に付けた資質、能力、学ぶ意欲や人間性などを、多様な入試制度により多元的に評価することを基本的な方針としています。</p> <p>II. 各学部のアドミッション・ポリシー 国際学部アドミッション・ポリシー 国際学部では、「国際性の涵養」という教育・研究上の理念を達成するために、「国際事情に関する課題の理解と分析」を教育・研究上の目的とする。その目的の達成を通じて、「国際性」(世界理解、国際理解のための能力)と「人間性」を備えた世界市民として、国際的なビジネス・市民社会で活躍できる人材を養成する。その教育・研究上の目的は、学生が高い外国語能力を習得し、世界の各地域を様々な角度(特に人文・社会科学の観点)から理解し、分析できるようになることである。このような教育・研究上の理念・目的を持った本学部では、以下のようなアドミッション・ポリシーを示して学生を迎え入れる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 人文・社会科学の多岐にわたる領域について幅広い関心と、一定の学力と論理的思考力を持ち、総合的な観点からそれらの課題に取り組もうとする意欲を持つ者 2. 主体的な関心に応じて、自らの問題を発見し、その問題解決に実践的に取り組もうとする意欲を持つ者 3. グローバル化する社会の中で他者の想念や異文化に関する感性や、自己のありかたに相対的・反省的視点を持つことが期待される者 4. 関西学院に対して強い帰属意識を持ち、スクールモットーである「Mastery for Service(奉仕のための練達)」という精神を体現しようとする意欲を持つ者 5. 海外生活経験を持つ生徒、留学生等、多様なバックグラウンドを有する者 6. 優れた外国語能力や、特定の分野において優れた学力・能力を持ち、入学後にそれを活かした教育成果が期待できる者 <p>以上の項目を募集方針の要素として、教科・科目を設定して筆記試験を中心とする一般選抜入学試験と、面接等を取り入れた各種入学試験を実施しています。高等学校における基礎学力の「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を、それぞれの入学試験において重み付けを行い評価しています。</p> <p>III. 入学試験毎のアドミッション・ポリシー</p> <p>1. 一般選抜入学試験 一般選抜入学試験は、各学部での教育に必要な「総合的な学力を持つ受験生を選抜する」ものです。 一般入学試験では各学部の教育理念・目標に基づき試験教科・科目、配点を設定し、筆記試験により関西学院大学で学ぶために必要な学力「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を判定するための問題を独自に作成しています。 全学日程の文系入学試験では本学で学ぶために必要な「英語」「国語」を必須とし、「日本史」「世界史」「地理」「数学(記述式)」を選択科目とし筆記試験を実施します。 全学日程の国際学部については、高い英語能力を有する生徒を評価するため、「英語」に特化した「英語」「英語論述」による入学試験も実施しています。 学部個別日程の文系入学試験では本学で学ぶために必要な「英語(記述式含む)」を必須とし、「国語(記述式含む)」「日本史」「世界史」「数学(記述式)」を選択科目とし筆記試験を実施します。なお文学部・法学部では「国語(記述式含む)」「日本史」「世界史」「数学(記述式)」に加えて「地理」を選択科目に加えています。人間福祉学部については学部個別日程において「英語」「国語」の2科目による筆記試験を行っています。教育学部については初等教育学コースの主体性評価方式の入試において、高等学校における生徒会活動、学校行事、課外活動等でのリーダーシップを、調査書と提出書類を合わせて評価する入学試験を実施します。理系入学試験においては全学日程を2日間実施、入試制度も2種類実施しています。総合型および数学・理科重視型においては、本学で学ぶために必要な「英語」「数学(記述式)」を必須とし、「理科(記述式)」「物理」「化学」「生物」のいずれかを選択する筆記試験を実施しています。</p> <p>一般入学試験関学独自方式日程は、英語・数車型、関学英語併用型、関学数学併用型の3方式を実施しています。英語・数車型は、関西学院大学独自の「英語(記述式含む)」と「数学(記述式)」による筆記試験を実施し、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を判定しています。関学英語併用型・関学数学併用型は、関西学院大学独自の「英語(記述式含む)」または「数学(記述式)」に、大学入学共通テストの教科・科目の得点を加味し、各学部で学ぶための学力と総合的な基礎学力を有する生徒を選抜するために実施しています。</p> <p>大学入学共通テストを利用する入学試験は、「一般入試とは異なるタイプの受験生を受け入れるための入試制度」と位置づけています。大学入学共通テストで実施している教科・科目の筆記試験をもとに、本学で学ぶために必要な総合的な基礎学力を「知識・技能」を中心に判定を行い、大学入学共通テストの得点のみで合否判定を行います。1月出願においては、総合政策学部3科目英数型を除く文系学部は「外国語」「国語」を必須として、「数学」「理科」「地理歴史」「公民」から高得点を採用する方式を3科目型、5科目型の方式で実施しています。理系は「英語」「数学」を必須として各学科の学びに必要な科目について必須科目もしくは選択科目として加え科目数を設定し、高等学校における各教科の基礎学力のうち「知識・技能」を評価します。3月出願においては、文系学部は「英語」を必須とし、「国語」「数学」「理科」「地理歴史」「公民」から高得点科目を採用する方式を実施しています。理系学部は「英語」「数学」を必須として各学科の学びに必要な科目について必須科目もしくは選択科目として加え、高等学校における各教科の基礎学力のうち「知識・技能」を評価します。</p> <p>また、大学入学共通テストを利用する入学試験(1月出願 英語検定試験活用型)は、「読む」「書く」「聞く」「話す」の英語の4技能を身に付けた生徒を選抜するために、提出された書類のうち英語検定試験のスコアを出願資格として高く評価し、大学入学共通テストの教科・科目の得点を活用して実施する入学試験であり、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を得点として評価し、検定試験に取り組んだ「主体性」を高く評価します。</p> <p>2. グローバル入学試験 グローバル入学試験は、入学後、本学のスーパーグローバル大学創成事業におけるインターナショナル・プログラムに積極的に取り組むことを希望する生徒や、将来、国際的な活躍を目指す生徒を対象に5つのカテゴリーで実施する入学試験です。</p> <p>① 国際貢献活動を志す者のための入学試験 国際貢献活動を志す者のための入学試験は、関西学院大学が先駆として実施している学生の国際ボランティアに参加することを志す者で、秀でた英語コミュニケーション能力を有し、国際的課題に関し興味を持ち課題解決のための提案を行い、実践しようとする意欲を持つ者を対象とした入学試験です。英語検定試験においてCEFR B2以上を有する生徒、課題研究や模擬国連等に取り組む知識・技能、思考力・判断力・表現力を有し主体性・多様性・協働性を高めた課題解決能力を有する生徒を対象に出願資格を設定し評価を行っています。一次審査においてはこれらの実績や成果と、提出された志望理由書等の書類と合わせた書類審査と口頭試問・適性面接審査により評価を行います。口頭試問・適性面接審査では日本語および英語による面接により、国際的な知識や英語コミュニケーション能力、発展途上国でのプログラムに参加するために必要なチャレンジ精神、価値観や粘り強さを評価しています。二次審査では志望する学部の面接(口頭試問含む)により学ぶ意欲や人間性などを評価し選抜を行います。</p> <p>② 英語能力・国際交流経験を有する者を対象とした入学試験 英語能力、国際交流経験を有する者を対象とした入学試験は、関西学院大学のインターナショナル・プログラム(国際教育プログラム)において国際社会で活躍する能力を身に付けることを志し、秀でた英語コミュニケーション能力を有する者、もしくは国際交流体験による異文化社会における経験を有する者で、国際的課題に関し興味をもち課題解決のための提案に意欲を有する者を対象とした入学試験です。出願資格として、英語検定試験において(CEFR B1程度以上)を有する生</p>	<p>有・無</p>

徒、海外における留学経験を有する生徒、模擬国連等に取り組み問題解決能力を育んだ生徒、英語弁論大会、英語エッセイコンテスト等において入賞した経験を持つ英語コミュニケーション能力を有する生徒を対象に設定し、調査書など提出された書類とあわせて、「主体性」を中心とした書類審査を行っています。また、英語を題材とした論述試験、日本語小論文試験を実施し「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を評価し、書類審査の結果と合わせた総合評価による一次審査を行います。二次審査では志望する学部の面接(口頭試問含む)により学ぶ意欲や人間性などを評価し選抜を行います。

③ インターナショナル・バカロレア入学試験

インターナショナル・バカロレア入学試験は、関西学院大学のインターナショナル・プログラム(国際教育プログラム)において、国際社会で活躍する能力を身につけることを志す者で、国際的に認められた大学入学資格であるインターナショナル・バカロレアDP(ディプロマ・プログラム)の課程を修了後、統一試験に合格し、インターナショナル・バカロレア資格を有する者を受け入れるための入学試験です。出願時においてフルディプロマを取得済みの者でスコアが32ポイント以上の者、もしくは取得見込でIBPREDICTED SCOREが出願時に32ポイント以上であるものは英語論述審査が免除となります。また日本の一条校において上記のスコアを有する者は日本語小論文が免除となります。これに満たない者については、英語を題材とした論述試験・日本語小論文試験を実施し「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を評価する一次審査を行います。二次審査においては学部の面接(口頭試問含む)により学ぶ意欲や人間性などを評価し選抜を行います。

④ グローバルキャリアを志す者のための入学試験(英語エッセイ方式)

グローバルキャリアを志す者のための入学試験は関西学院大学のインターナショナル・プログラム(国際教育プログラム)もしくは総合政策学部独自のカリキュラムである(グローバルキャリア・プログラム)において、国際社会で活躍することを志し、英語コミュニケーション能力をもつ者を対象とした入学試験です。国際社会で活躍する能力を身につけることをめざし、現代社会で話題となっている様々なニュース、トピックに対して、自身の知識や考えを英語で伝えることのできる生徒を対象に実施します。一次審査においては筆記審査を行い、現代社会で話題となっているトピック4題のうち、2題を選択し、それぞれ英語300語程度のエッセイを書いてもらいます。また自分の書いたエッセイに適切な英語のタイトルをつけてもらいます。トピックはいずれも英語で書かれており、それらに関する情報や資料は掲載されていません。そのトピックについての知識、考え方も評価の対象とします。新聞などで社会の動きを知っていることも問われます。二次審査においては、面接(口頭試問含む)を行い学ぶ意欲や人間性を評価し書類審査と合わせて総合的に評価し選抜を行います。

⑤ グローバルサイエンティスト・エンジニア入学試験

グローバルサイエンティスト・エンジニア入学試験は国際的に活躍する科学者や技術者となることを志し、自然科学に関する科目について一定の学力を有し、秀でた英語コミュニケーション能力を有する者、インターナショナル・バカロレア資格を有する者、高等学校在籍時に海外において自然科学に関する教育を受けた経験を有する者もしくは自然科学分野における特記すべき国際交流経験を有する者、国際科学技術コンテストに出場した経験を有する者を出願資格として設定し、調査書等提出された書類とあわせ「主体性」を中心に書類審査を行います。また、入学後必要な数学、理科の基礎知識を問う筆記試験を実施し「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を中心に評価し、書類審査の結果と合わせた総合評価による一次審査を行います。二次審査では志望する学部の面接(口頭試問含む)により学ぶ意欲や「主体性・多様性・協働性」について評価し、出願時提出書類と合わせて総合的に判断し選抜を行います。

3. 推薦入学

推薦入学は高等学校長の責任ある推薦により本学で学ぶために必要な学力を有する生徒を受け入れるものです。審査においては調査書、自己推薦書、志望理由書、学校長推薦書等の提出書類による書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多角的に評価します。

① 院内推薦入学

1) 関西学院高等部

関西学院高等部推薦入学は関西学院の一貫教育の大きな柱として位置づけられています。高等部でキリスト教主義教育による関西学院の建学の精神をもとに学んだ生徒を受け入れることにより、大学進学後もそれぞれの学部において、正課、課外活動、学内諸活動の面で学生の核となり、他の入学者に対しても良い影響を与え関西学院の学風を担うことを期待し実施するものです。審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多角的に評価します。

2) 関西学院千里国際高等部

関西学院千里国際高等部推薦入学は、千里国際高等部の特色である国際教育と、キリスト教主義教育による関西学院の建学の精神をもとに学んだ生徒を受け入れることにより、大学進学後もそれぞれの学部において、正課、課外活動、学内諸活動の面で学生の核となり、関西学院大学の活性化に寄与することを期待し実施するものです。審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多角的に評価します。

② 継続校推薦入学

啓明学院継続校推薦入学は、キリスト教主義教育により学んだ啓明学院高等部の生徒を受け入れることにより、大学進学後もそれぞれの学部において、正課、課外活動、学内諸活動の面で学生の核となり、関西学院大学の活性化に寄与することを期待し実施するものです。審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多角的に評価します。

③ 提携校推薦入学

関西学院大学提携校推薦入学は、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れるために実施しています。関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、各校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒を受け入れるものです。審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多角的に評価します。

④ 協定校推薦入学

1) キリスト教学校校

関西学院大学協定校推薦入学は、高等学校のキリスト教主義教育により学び、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れるために実施しています。関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒を受け入れるものです。審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多角的に評価します。

2) グローバル校

関西学院大学協定校推薦入学は、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れるために実施しています。21世紀的な教育目標であるグローバルな観点に立って国際社会に貢献できる人材として、関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒を受け入れるものです。審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多角的に評価します。

3) グローバル+キリスト教校校

関西学院大学協定校推薦入学は、21世紀的な教育目標であるグローバルな観点に立って国際社会に貢献できる人材として、高等学校のキリスト教主義教育により学び、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れ、関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒をも受け入れるために実施するものです。審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多角的に評価します。

⑤ 指定校推薦入学

指定校推薦入学は一定の学力「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を有する生徒を高等学校長の責任に基づく推薦を受け、書類審

査・面接(口頭試問含む)によって各学部において学ぶ意欲等を総合的に評価し受け入れるための制度です。

国際学部

関西学院大学国際学部において勉学することに強い意欲をもち、成績優秀で個性ゆたかな生徒を推薦入学させることによって、本学建学の精神および本学部の教育・研究上の理念である「国際性の涵養」に基づく世界市民と呼ぶにふさわしい国際性と人間性を備えた人材を育成することを目的とします。審査では志願提出書類、面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

⑥ 指定校推薦編入学

関西学院大学指定校推薦編入学制度では、指定校学校長の責任に基づいて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」等の能力や資質を有すると判断され推薦された学生を、各学部が書類審査・面接等を通して総合的に評価し、編入性として受け入れます。神学部推薦編入学制度では、関西学院聖和短期大学に特有のキリスト教主義に基づく保育者育成教育を受け、上述のとおり推薦された学生のうち、将来において伝道者あるいはクリスチャン・ワーカーとして社会に貢献することを志してキリスト教神学の理解をさらに深めることを願う者を、書類審査、面接(口頭試問含む)等を通して総合的に評価し、編入生として受け入れます。

4. SGH・SSH・探求(課題研究)評価型入学試験

1) スーパーグローバルハイスクール対象入学試験

関西学院は、キリスト教主義に基づく「学びと探究の共同体」として、ここに集うすべての者が生涯をかけて取り組む人生の目標を見出せるよう導き、思いやりと高潔さをもって社会を変革することにより、スクールモットー“Mastery for Service”を体現する、創造的かつ有能な世界市民を育むことを使命としています。2014年度よりスタートした文部科学省スーパーグローバルハイスクール事業は、急速にグローバル化が加速する現状を踏まえ、社会課題に対する関心と深い教養に加え、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付けることを重視し、課題研究と高大連携を二本の柱として教育プログラムの開発を目指しています。このスーパーグローバルハイスクール、SGHアソシエイト校において、課題研究を通じて能力を高めた生徒を、多面的・総合的に評価を行い、積極的に受け入れ、本学が採択されたスーパーグローバル大学事業への接続を促進するための入学試験を実施します。一次審査においては書類審査を行います。さらに二次審査において学部毎に面接・集団討論・プレゼンテーション・口頭試問を行います。課題研究を通じて培った「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的、多元的に評価を行います。高等学校までの学びを通じて培ったありのままの力を評価しますので、入学試験のために特段の準備を必要とするものではありません。出願資格として、英語検定試験スコアCEFR B1レベル以上を有する者と設定しています。

2) スーパーサイエンスハイスクール対象入学試験

関西学院は、キリスト教主義に基づく「学びと探究の共同体」として、ここに集うすべての者が生涯をかけて取り組む人生の目標を見出せるよう導き、思いやりと高潔さをもって社会を変革することにより、スクールモットーMastery for Service.を体現する、創造的かつ有能な世界市民を育むことを使命としています。文部科学省スーパーサイエンスハイスクール事業の趣旨は、高等学校及び中高一貫教育校における先進的な理数教育を通じ、生徒の科学知識・技能と科学的思考力・判断力を高めることにより将来の国際的な科学技術系人材の育成を図ることとなっています。スーパーサイエンスハイスクールにおいて、課題研究を通じて能力を高めた生徒を、多面的・総合的に評価を行い、積極的に受け入れ、本学が採択されたスーパーグローバル大学事業への接続を促進するための入学試験を実施します。一次審査においては書類審査を行います。さらに二次審査において学部毎に面接・集団討論・プレゼンテーション・口頭試問を行います。課題研究を通じて培った「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的、多元的に評価を行います。高等学校までの学びを通じて培ったありのままの力を評価しますので、入学試験のために特段の準備を必要とするものではありません。出願資格として、英語検定試験スコアCEFR A2レベル以上を有する者と設定しています。

3) 探求(課題研究)評価型入学試験

関西学院のスクールモットーは“Mastery for Service”。これは、第4代院長C.J.L.ベーツ宣教師が学生たちに与えた言葉で、「奉仕のための練達」と訳されています。わかりやすく言えば、「人々に奉仕できる、社会に役立つ知識と人間性を、自らの主体性を持って磨き上げよ」ということです。関西学院大学では、その教育目的を具現化できる、意欲に満ちた受験生を求めています。特に、本学で学ぶにふさわしい知識・技能、思考力・判断力・表現力を有しているだけでなく、横断的・総合的な学習や探求的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を持ち、多様な人々と協働して学ぶ態度を身につけた学生を求めています。一次審査においては書類審査を行います。さらに二次審査において学部毎に面接・集団討論・プレゼンテーション・口頭試問を行います。課題研究を通じて培った「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的、多元的に評価を行います。高等学校までの学びを通じて培ったありのままの力を評価しますので、入学試験のために特段の準備を必要とするものではありません。出願資格として、英語検定試験スコアCEFR A2レベル以上を有する者と設定しています。

10. UNHCR難民高等教育プログラムによる推薦入学

「UNHCR難民高等教育プログラムによる推薦入学」は、関西学院大学と国連難民高等弁務官(UNHCR)駐日事務所および国連UNHCR協会との協定に基づき実施する入学制度です。これは本学の建学の精神に基づく「人類の幸福と平和に資する世界市民の育成」を現代に即したかたちで実現するためのものです。日本で生活する難民の方々は、厳しい環境下におかれています。特に教育面では、本人や家族の経済的事情や、母国での出身校の卒業証明が得られないなどの理由で、高等教育を受ける機会を失っている場合が少なくありません。それが就労条件の悪化、さらには、経済的事情の悪化につながっています。こうした状況を少しでも改善することを目的とするこの推薦入学制度で入学した生徒が、高い教養と専門性を身につけ、将来、日本、母国あるいは国際社会において平和の構築や社会の発展を支える人材へと成長することが期待されています。また関西学院大学で共に学ぶ他の学生にとっても、迫害や戦争といった国際社会が抱える問題を身近に捉えるとともに、日本国内の国際化を意識する機会となります。国連難民高等弁務官(UNHCR)駐日事務所および国連UNHCR協会の推薦に基づき、面接(口頭試問含む)を行い本学で学ぶ意欲を中心にしながら「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」について評価を行います。

11. スポーツ能力に優れた者を対象とした入学試験

この選抜入学試験制度は、スポーツ活動において優れた能力と競技実績を有し、入学後は学業と課外活動を両立させる強い意欲をもつ者を積極的に受け入れ、本学における教育の活性化と課外活動の一層の振興に寄与することを目指すものです。提出された書類に基づきスポーツ実績を評価するとともに、本学で学ぶにあたっての基礎学力、知識、表現力、論理的思考力を筆記試験により評価を行います。一次合格者に対する二次審査は面接(口頭試問含む)を実施し志願する学部で学ぶ意欲を中心に評価を行います。

12. 外国人留学生入学試験

本学は、米国南メソジスト監督教会の宣教師、W.R.ランバスによって創設されました。開学当初から多くの外国人教員が教鞭をとっていたこともあり、外国人留学生を古くから受け入れ、日本の大学の中では国際色豊かな大学としてその学風を育んできました。この入学試験制度は外国人留学生を対象とし、さまざまな国からの留学生を受け入れることにより、大学の国際性を一層高め、ひいてはキャンパスの活性化を図る教育効果も期待した、いわゆる「多元的入試」の一環として実施されます。出願時の提出書類に基づき審査を実施し、本学で学ぶにあたって必要な日本語力および、基礎学力を有しているかを審査した後、各学部が面接審査(口頭試問を含む)・筆記試験等を実施し、志願する学部で学ぶ意欲や人間性などを中心に評価し、出願時提出書類と合わせて総合的に判断し、選抜します。

<p>13. 学部特色入学試験 <大学全体のAP> 国際学部 関西学院大学国際学部では、「国際性の涵養」という教育・研究上の理念を達成するため、「国際事情に関する課題の理解と分析」を教育・研究上の目的としています。その目的の達成を通じて、「国際性」(世界理解、国際理解のための能力)と「人間性」を備えた世界市民として、国際的なビジネス・市民社会で活躍できる人材の養成をめざしています。その教育・研究上の目的は、学生が高い外国語能力を習得し、世界の各地域を様々な角度(特に人文・社会科学の観点)から理解し、分析できるようになることです。</p> <p>本学部では、このような教育・研究上の理念・目的に基づいて、学部特色入学試験を実施します。この入学試験では、本学部に強い関心と学習意欲を持ち、高い中国語・朝鮮語能力を有する人、文化・芸術活動に関して秀でた経験を有する人、社会人を対象として、従来的一般学力試験では判断することができない多様な経験、活動を通じて身につけた豊かな人間性、将来性、可能性、能力を多面的に、積極的に評価します。</p> <p>審査は書類審査・筆記審査・面接審査(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。書類審査においては提出された書類や調査書に基づき、高等学校での学びや活動の成果から「主体性・多様性・協働性」などを中心に評価を行います。筆記審査においては日本語資料による読解・論述審査、英語資料による読解・論述審査を行い「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を中心とした学力を評価します。さらに面接審査(口頭試問含む)においては上述の本学部で学ぶ意欲を中心に総合的に評価を行います。</p>	
<p>学生支援に関する方針</p>	<p>変更の有無</p>
<p>すべての学生が学習上のさまざまな障壁を乗り越えて学業を修めることを可能にするように、全学的体制を踏まえ、学部教員・職員が一体となった学生支援を行う。</p> <p>修学支援</p> <ul style="list-style-type: none"> * リサーチ、発表、学術的レポート(論文)作成のための知識と学力を習得することを目的とする必修の演習科目を1年次に配置し、国際学部での専門科目および3年次から始まる研究演習において必要とされるレベルを想定して、その基礎的部分を習得できるよう取り組む。 * LA(ラーニング・アシスタント)として国際学部生を各学期一定の人数採用し、基礎演習学生・外国人留学生等のサポートを依頼する。 * 全学レベルで導入されているアカデミックアドバイザー制度を活用し、学習上の問題を抱える学生を支援する。 * 留年者及び休・退学者の状況把握については、基礎演習・研究演習・外国語教育授業等を通じて適切な把握に努め、教職員の協働により取り組む。 * 障がい学生への修学支援及び各種ハラスメントの防止に関しては、全学のガイドラインに沿って教職員の協働により取り組む。 <p>生活支援</p> <ul style="list-style-type: none"> * 全学レベルの奨学金制度を活用する。 * 学生担当副学部長及び同学部長補佐を配置し、職員を含めた面談体制を整える。 <p>進路支援</p> <ul style="list-style-type: none"> * キャリア委員会を設置し、学部を挙げて進路支援を実施する。 * 就職・進学に関する情報の提供や助言等を実施・支援する。 	<p>有・</p>
<p>教員像</p>	<p>変更の有無</p>
<p>キリスト教主義に発する建学の精神を深く理解し、垣根なき学びと探究の共同体をめざし、教育においては教育能力の向上のため自己研鑽と相互研鑽に努めるとともに、情熱を持って学生の育成に努め、研究においては高度な専門知識と高い倫理観・自律性を持って学術研究や国内外の交流に自覚的に取り組み、学会のみならず社会全体において高い評価を受けるとともに、その成果を不断に教育に反映し、社会活動においては国内外において社会と大学との相互交流を促進し、自己の教育研究の成果や実績を社会に還元しこれに寄与し、大学運営においては職員との深い相互理解に基づく連携によって、さまざまな問題の解決や課題の達成に寄与する。</p>	<p>有・</p>
<p>教員組織の編制方針</p>	<p>変更の有無</p>
<p>教授 27 名、准教授 5 名、講師 13 名、計 45 人の専任教員・任期制教員・言語教育常勤講師を、文化・言語、社会・ガバナンス、経済・経営の3領域、北米、アジア、グローバルの3分野にバランスをとって配置している。また、教育研究、社会活動におけるグローバル化を進める観点から、外国人教員比率を高く設定している。</p>	<p>・無</p>

2. 実施計画

(1) 必須型

実施計画(タイトル)	1-(1)-① 「Kwansei コンピテンシー」の策定と運用			帳票の有無	不要
内容	<p>本大学は、大学として「学部の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」(「Kwansei コンピテンシー」)を時代に即して新たに定め、各学部はそれを土台に「各分野における学位授与に必要な知識・技能」であるDP(ディプロマポリシー)を再策定する。 また、策定された「Kwansei コンピテンシー」を基に大学として「学部の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」の到達状況を測定、評価する取組を推進する。</p>				
学部独自の取り組み内容					
<指標 1>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	※学部における毎年度の本帳票の作成および学内各種会議体での点検・評価、改善活動などにより、内部質保証システムの PDCA サイクルを確立する。				
目標					
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標					
実績					
【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】					

実施計画(タイトル)	1-(1)-② 三つのポリシーに基づく教学マネジメントの推進(3ポリシーの見直し・検証、カリキュラム見直し・拡充、カリキュラムマップの整備)			帳票の有無	不要
内容	<p>本学は、大学として「学部の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」(「Kwansei コンピテンシー」)を時代に即して新たに定め、各学部・研究科はそれを土台に「各分野における学位授与に必要な知識・技能」である DP(ディプロマポリシー)を策定する。この DP は、すべての学生が卒業/修了必要単位数を取得した段階で修得しているべき学修成果を表したものである。この基本原理を守るべく、学部・研究科は(a)DP の再確認(b)DP と CP(カリキュラムポリシー)の整合(c)シラバスの実質化(d)シラバスに沿った成績評価(e)DP と AP(アドミッションポリシー)の連動、を厳格に運用する。</p> <p>本学はこうした学部/研究科による三つのポリシーに基づく教学マネジメントを統括し、大学全体の内部質保証を推進することで、卒業する全ての学生の質を保証する。</p>				
学部独自の取り組み内容	国際学部では、学部自己評価委員会において三つのポリシーの適切性を確認している。また、FD委員会が主体となって、学生との意見交換会(基礎演習・元基礎演習・研究演習 I・IIゼミ長、外国人留学生日本語話者・英語話者)を持ち、その結果を基に学部自己評価委員会が DP と CP の整合性等を検証している。				
<指標 1>	「学修行動と授業に関する調査」における「調査項目 5. あなたはこの授業を通して、卒業までに求められる資質・能力を向上できたと思いますか。」との質問に対する肯定的回答の割合(そう思う+どちらかというと思うの人数/履修人数)				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標	70%以上	70%以上	70%以上	80%以上	
実績	80.7%	81.9%			
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標	80%以上	80%以上	80%以上	80%以上	
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標					
実績					
<p>【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】</p> <p>3 つのポリシー(ディプロマ・ポリシー(DP)、カリキュラム・ポリシー(CP)、アドミッション・ポリシー(AP))に関する適切性の確認、授業調査や学生との意見交換会を踏まえた教育内容・方法の定期的検証について、教授会(4月13日開催)での懇談を経て、学部として検証を行った。さらに、2023 年度からの新カリキュラムに対応するため、DP・CPを見直し、教授会(11月9日開催)で審議して承認した。また、春学期の定期試験までの期間(6月28日~7月8日)にゼミ長を中心に3年ぶりに対面で学生インタビューを実施し、多くの意見を聞くことができた。急を要するものから順次対応し、かつ出された意見を一覧にまとめて執行部でも情報を共有した。</p>					

実施計画(タイトル)	1-(9)-① 入試制度改革への対応	帳票の有無	不要	
内容	<p>グローバル化や情報化の進展、少子高齢社会の到来など社会の在り方が急速に変わり、予測が難しい状況の中で、自ら問題を発見し、他者と協力して解決していくための力が必要とされており、2015年1月に文部科学省より「高大接続改革実行プラン」が発表され、高大接続改革は、「高校教育」「大学教育」そしてそれをつなぐ「大学入学者選抜」の一体的な改革で、それぞれについて様々な施策が進んでいる。「大学入学者選抜改革」においては、これまで以上に多面的・総合的に人物を評価する入試への転換を掲げ、大学入試センター試験を廃止し、思考力・判断力・表現力を一層重視した「大学入学共通テスト」を2020年度(2021年1月実施)より導入。大学入学共通テストでは、国語と数学に記述式問題を導入すること、英語については4技能を適切に評価するため民間の資格・検定試験を活用することが決まっている。また、各大学の個別選抜では、アドミッション・ポリシーの明確化とともに、より多面的な選抜方法にすることが求められている。一方、AO入試や推薦入試では、一部で「学力不問になっている」といった批判があることから、小論文やプレゼンテーション、大学入学共通テストなどを通じて、学力を問う試験を必須化する方針も示されている。</p> <p>このような状況において、本学においては学長が入試委員長として全学部長が入試委員となる入試委員会が中心となり、以下のような入試制度改革を進めていく。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 高大接続改革で求められる入試制度改革への対応 上記の改革を進めるため、本学ではすべての入試において「学力3要素」を評価する入試へと変えていく。また、SGUでもある本学においてはすべての入試において英語の4技能を評価する入試へと変えていく。合わせて、各種入試においても、現行やや一芸入試的な色合いの濃いAO入試においては高等学校での活動をしっかりと評価する入試への変更を、そして、現行SGH・SSH指定校に限定している公募推薦入試も課題研究を実践しているすべての高等学校に拡大し、高等学校での探究活動を評価する入試へと変更させていく。 2. 現行入試制度・募集人員の再検討 上記のような国の高大接続改革が進むと、例えば、国公立大学ではAO入試の割合が増加する。また、18歳人口の減少という人口構造の変化(少子化)により、より一層前倒し(各種入試への定員のシフト)によって学生を確保する必要が生じる。今後、各種入試と一般入試の定員比率の再検討とともに、各種入試の定員の見直しを進める必要がある。 3. 主体性等を評価するための入試体制強化やアドミッションオフィサー配置 上記のとおり、今後の大学入試においては、学力3要素を評価するため、小論文やプレゼンテーション、課題研究論文、面接や調査書など高等学校への学びをひとりひとり丁寧に評価する入試が拡大してくる。それに伴って当然、これまで入試選抜を担ってこられた教員だけでは対応することが困難となる。そのため、職員からも提出書類の評価を行うアドミッションオフィサーを配置することが求められる。今後、アドミッションオフィサーへの入試評価業務の委嘱を進めていく。 			
学部独自の取り組み内容	<p>国際学部の多様性を促進するために、さらなる外国人留学生の国籍の多様化を図る。 従来日本語による授業を履修し、卒業できるだけの高い日本語能力を入学試験で求めてきたが、結果として特定の国の留学生が多くなっている。そこで、外国人留学生が受験する入試の日本語話者枠を減じ、英語話者(Ebis)枠を1学年20名程度(現行10~15名)に拡大する。</p>			
<指標1>	2019年度在学生のいない国・地域からの受験者数			
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
目標	海外指定校訪問数(2校以上)	海外指定校訪問数(2校以上)	海外指定校訪問数(2校以上)	①海外指定校訪問数(2校以上) ②説明会実施回数(3回以上、オンライン実施含む)
実績	訪問0回、オンライン2回(インドネシア) 指標の国・地域からの受験者数0名	訪問0回、オンライン3回(インドネシア、Ebisオープンデイ企画) 指標の国・地域からの受験者数4名 (オランダ、パキスタン、ロシア、ヘルー)	訪問0回、オンライン4回(Ebisオープンデイ企画、日本留学フェアASEAN) 指標の国・地域からの受験者数3名 (ミャンマー、オーストラリア、アラブ首長国連邦)	
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
目標	①海外指定校訪問数(2校以上) ②説明会実施回数(3回以上、オンライン実施含む)	-(2023年度に検討)	-(2023年度に検討)	-(2025年度に検討)
実績				
<指標2>				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
目標				
実績				
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
目標				
実績				
<p>【2022年度の進捗状況・今後の取り組み】 これまで外国人留学生入試において、東南アジア、オセアニア、ヨーロッパ、アフリカ、北米等様々な地域から受験生が集まってきたが、日本語話者においては高い日本語能力を入試で求めるがゆえ、特定の国(東アジア漢字圏)の留学生が多くなっている。2023年度入試における日本語話者留学生の国籍多様化をめざし、2021年度に外国人留学生海外推薦入学(CIEC指定校、韓国高校との推薦入学)・国際学部外国人留学生指定校推薦入学の推薦依頼校枠の変更を教授会(2021年11月10日開催)で決定し、日本語話者留学生の国籍多様性確保のための施策を進めている。2023年4月入学予定の日本語話者留学生は、マレーシア・ミャンマー・マダガスカルと多様化が進み、かつ留学フェア等へのオンライン参加の継続により、インドネシアの協定高校より2023年9月入学生1名の受入を予定している。コロナ禍での水際対策も緩和され、日本語教育機関での留学生受入が戻りつつあり、多様な留学生が在籍する機関とのパイプを強めるべく、新たに説明会の実施回数を増やす。さらに今後、外国人留学生が受験する入試の日本語話者枠を減じ、英語話者(Ebis)枠を1学年20名程度(現行10~15名)に拡大することで、外国人留学生の多様化が図れるかを引き続き検討する。</p>				

実施計画(タイトル)	1-(12)-③ CAP制の実質化			帳票の有無	不要
内容	<p>履修単位上限数を下げて「キャップ制度(履修単位数の上限設定)」を実質化する。学生は授業外にさらに学修する時間が確保されるとともに、総履修者が減ることやカリキュラム上の科目数減少をあわせて検討すれば教育負担の大幅減少へという相乗効果も期待できる。</p> <p>(メモ)</p> <p>※履修放棄を減らし、教員・学生が授業により集中できる環境を作り、単位の実質化を目指す。</p> <p>※学部への現状調査資料が入手できたので今後、指標を検討する。</p> <p>※副次的課題:MSプログラムによるCAPの緩和</p>				
学部独自の取り組み内容	2022年度入学生より、MS履修時の上限を、36単位から30単位に変更。かつ申請時の通算GPA2.8以上の基準を設けた。今後、履修単位数制限緩和後の学生のGPAを追跡し、GPAが下がり基準の2.8を下回った学生の指導を行う予定である。				
<指標1>	履修単位数制限を緩和した人数				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	—	—	50名	50名	
実績	48名	64名	51名		
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	50名	40名	40名	40名	
実績					
<指標2>	GPA2.8を下回り、指導した人数(指導学生数/指導対象人数)				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	—	—	—	100%	
実績	—	—	—	%(名/名)	
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	100%	100%	100%	100%	
実績	%(名/名)	%(名/名)	%(名/名)	%(名/名)	
大学基準協会による指摘事項(認証評価)	指摘事項	国際学部は、複数分野専攻制(MS)を履修している者に限り、各学期36単位まで履修することができると定めており、1年間に履修登録できる単位数の上限が72単位と高く、各種の選考によって安易な制度利用を防止しているものの、単位の実質化が十分に図られているとは認められないため、単位の実質化のための改善が求められる。			
	改善計画	複数分野専攻制(MS)履修者について、2022年度入学生より、MSプログラム開始時点での通算GPAが2.8以上の者に限り、各学期30単位以内とするように、内規を改正する。			
<指標3>	評価の指摘事項に対する対応				
ロードマップ	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標		2022年度入学生よりMS履修時の上限を、36単位から30単位に変更する。			
実績		2022年度入学生よりMS履修時の上限を、36単位から30単位に変更。かつ申請時の通算GPA2.8以上の基準を設けた。(2021年6月9日教授会承認)			
<p>【2021年度の進捗状況・今後の取り組み】 履修単位の上限を引き下げた場合の卒業までの修得単位計画のシミュレーションを実施し、通常の履修計画であればMSと卒業との両立は問題ないことを確認した。また、現在の国際学部生のGPA平均なども考慮の上、申請時の通算GPA2.8を履修単位数制限緩和の条件に加えることとし、教授会(2021年6月9日)にて審議し、承認を受けた。今後、履修単位数制限緩和後の学生のGPAを追跡し、GPAが下がった学生の指導を行う予定である。</p> <p>【2022年度の進捗状況・今後の取り組み】 昨年度に設けた履修上制限単位数の緩和に係る条件につき、2022年度入学生より対象となるため、今年度の人数増減に影響は見られなかった。次年度以降につき、上記条件に当てはまる学生に対し、修得単位数やGPAの推移を追跡していくことになる。</p>					

実施計画(タイトル)	1-(12)-⑧ シラバスの実質化			帳票の有無	不要
内容	組織的な教育力を向上するため、三つのポリシーに基づく教学マネジメントを推進することが中心的な課題であり、そのための重点戦略としてシラバスの精緻化から取り組む。特に「授業目的」と「到達目標」を明確にすることで、カリキュラム全体の中での科目の位置づけや他の科目との比較が可能になり、科目間の相互関係を整理する契機となる。それによって CP や DP の適切性・妥当性といった上流に遡ることが可能となる。また、シラバスの精緻化は、授業外学修時間の増加につながる。				
学部独自の取り組み内容	国際学部では、毎年カリキュラム運営委員会において、重点項目を挙げてその精緻化に取り組んでいる。				
<指標 1>	重点項目における点検割合(点検科目数/全科目数)				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標	100%	100%	100%	100%	
実績	100%	100%			
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標	100%	100%	100%	100%	
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標					
実績					
<p>【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】</p> <p>・2022 年度開講科目のシラバス作成に向けては、「授業形態」欄にオンライン受講者への対応を含め、正しく記載されているかに加え、「成績評価」欄に出席(attendance)に点数を付与する旨の記載がなされていないかの2点を重点項目として、第三者チェックを行った。</p>					

実施計画(タイトル)	1-(13)-② 教職協働によるアカデミックアドバイスの仕組み確立			帳票の有無	不要
内容	<p>教職協働によるアカデミックアドバイスの仕組みを確立し、学生の学びをサポートし、残留生、退学者をださないキャンパスを目指す。アカデミックアドバイス制度は実施から4年がたち、現在行われている対象学生の見直しなどの検討も必要となっている。</p> <p>— 以下、SGU時の文章 —</p> <p>本学では、従来から成績不振者へのサポートを目的とした様々な指導を学部ごとに実施してきたが、GPAのさらなる活用と学生に対してより適切かつ高度な学修支援を行うという観点から、2015年度より「アカデミックアドバイザー制度」を全学的な仕組みとして導入する。</p> <p>アカデミックアドバイザーは、学部ごとに人数を定め、学部所属の専任教員から選出するものとする。各学部は修得単位数、GPA、出席状況のいずれか、もしくは複数を用いて指導対象となる学生の基準を定める。指導対象学生に対しては、アカデミックアドバイザーが個別面談および学修指導等の修学上の支援を行う。</p> <p>制度導入後は、教育力向上(ファカルティ・ディベロップメント)部会において本制度の運用状況に関する情報共有を行い、より一層の改善等に取り組む予定である。</p>				
学部独自の取り組み内容	<p>国際学部では、アカデミックアドバイス制度として、以下基準のほか、演習担当教員が希望した学生につき、演習担当者と事務職員にて3者面談を実施している。</p> <p>◆2年生～4年生については、以下①、②の両方を満たす学生</p> <p>①標準修得単位数の8割(2年生24単位、3年生49単位、4年生74単位)未満</p> <p>②GPA1.0未満</p> <p>◆1年生については、以下①、②の両方を満たす学生</p> <p>①修得単位数が12単位未満</p> <p>②GPA1.0未満</p>				
<指標1>	成績不振学生の状況把握率(当該成績不振学生の内、状況や成績不振理由を把握した学生数/当該成績不振学生数)				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	100%	100%	100%	100%	
実績	50.0%	63.2%	80%		
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	100%	100%	100%	100%	
実績					
<指標2>					
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標					
実績					
<p>【2022年度の進捗状況・今後の取り組み】</p> <p>アカデミックアドバイス制度として、一定の基準に合致する学生や演習担当者と事務職員にて三者面談を実施している。2022年度においては授業が原則対面となったため、面談方法も対面を原則としたが、演習担当者が希望する場合のみオンライン面談にて実施した。なお、面談対象基準については単位認定を含めない修得単位数を基準とすることで、学修面に困難を感じている学生を漏れることなく面談対象者とすることができた。また、例年と比較し状況把握率が高い理由としては、複数回にわたって学生に連絡を試みたこと、面談実施期間を例年より1週間ほど長く設定したことがあげられる。</p>					

実施計画(タイトル)	1-(13)-③ TA・LA・SAの活用推進			帳票の有無	要
内容	<p>LAの配置により、授業での教育支援(教員への支援を含む)、授業外での学修支援を強化する。初年次教育である導入科目等を対象としたLAIについては制度開始から7年がたち、今後の在り方は新たなライティングサポート制度と合わせて考えていく。</p> <p>SAについては、特に全学科目情報科学科目の現状の課題を抽出し、現状のままか、外部委託するかを検討する。</p> <p>TAIについて各学部では、①大学院生の減少で確保が難しい、②大学院生全員にあたらぬ、③月額報酬の場合、報酬に対して実働が少ない、人によって実働に差が生じる、④確保したいが他研究科生を重複採用できない、などの課題があり、①業務実働に合わせた報酬制度、②他研究科生の重複採用、③外部委託、などを検討することが考えられる。</p>				
学部独自の取り組み内容	国際学研究科では研究者養成だけでなく、幅広くグローバルに活躍するビジネスパーソンを養成しており、グローバルでリーダーシップを発揮するための教育経験として教学補佐(特に、授業補佐業務)を毎年5名程度採用している				
<指標1>	教学補佐へのアンケート結果「教育経験として役に立った」を選択した割合(「教育経験として役に立った」を選択した人数/教学補佐人数)				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	70%以上	70%以上	70%以上	70%以上	
実績	—	66.7% (教学補佐6名中4名より回答を得、全員が「非常に役立つ」or「役立つ」と回答)	20% (教学補佐5名中1名より回答を得、「非常に役立つ」or「役立つ」と回答)		
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	—(2023年度に検討)	—(2023年度に検討)	—(2025年度に検討)	—(2025年度に検討)	
実績					
<指標2>					
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標					
実績					
<p>【2022年度の進捗状況・今後の取り組み】</p> <p>国際学研究科では研究者養成だけでなく、幅広くグローバルに活躍するビジネスパーソンを養成しており、グローバルでリーダーシップを発揮するための教育経験として教学補佐(特に、授業補佐業務)を毎年5名程度採用している(2022年度5名)。今後の取り組みについては、全学的な動きを踏まえて検討する。</p> <p>なお、今年度のアンケート回収率が低かったことから、2023年度以降は対象者に直接ヒアリングするなど、回収率を上げるよう検討する。</p>					

実施計画(タイトル)	8-(2)-① KGI・KPIの設定・活用			帳票の有無	不要
内容	<p>非営利組織である学校のマネジメントにおける最大の課題の一つは、最上位のアウトカム(成果)を定め、その達成度を測るKGIやKPIを設定することにある。学院ではKPIダッシュボード等のツールを活用して「Kwansei Grand Challenge 2039」(超長期ビジョン・長期戦略)および中期総合経営計画(実施計画・基盤計画)の進捗や達成度を含めた成果を検証する仕組みを構築する。そのために、教学・経営両面のデータ活用を司るのに最適な組織体制を確立する。また、各学校および大学の各学部も、全学のKPIと連動しながら個別の状況に合わせて独自にKPIを設定し、毎年その数値や取組状況を評価し、改善・促進の取り組みに活用する。</p>				
学部独自の取り組み内容					
<指標 1>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	<p>※本帳票の末尾において、学修成果を測定する学部独自のKGI・KPIを策定しており、これらの指標を用いて毎年度学部における実施計画・全体の取組みの評価を行っている。</p>				
目標					
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標					
実績					
【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】					

実施計画(タイトル)	8-(10)-① 内部質保証体制の確立と運用			帳票の有無	要
内容	<p>本学には、従来から二つの大きなPDCAサイクルが存在していた。一つは中期計画(含む)であり、もう一つは大学の自己点検・評価および各学校の学校評価である。両者はそれぞれの目的体系を持ちながら重複する部分が多く、業務負担の軽減の観点からも、共通の目的・目標の下で学院・大学全体を見渡した統合的なPDCAサイクルの確立が必須となっている。</p> <p>このため、本学では、2019 年度から各学部／研究科、短期大学・各学校が本格的に取組を開始する「中期総合経営計画」において、その取組の成果を定期的に測定、評価、改善することを通じて、効率的・効果的なマネジメントの実現を図る。</p>				
学部独自の取り組み内容					
<指標 1>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	※2020 年度入学生より、「Kwansei コンピテンシー」を獲得することを念頭に置く旨を、各学部のディプロマ・ポリシー(DP)に追記済。				
目標					
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標					
実績					
【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】					

3. 国際学部のKPI

(1) 学修成果に関するKPI

KPI	定義	基準	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
DPIに定める資質・能力の獲得状況	あなたはこの授業を通して卒業までに求められる資質・能力を向上できたと思いますか。(「そう思う」～「そう思わない」の5段階評価) 「学修行動と授業に関する調査」	5段階評価のうち、上位2つ (A「そう思う」、B「どちらかといえばそう思う」)の回答割合(%)	非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
Kwansei コンピテンシー獲得状況	知識・能力・資質の程度 全項目 (「大変身についた」～「全く身につけていない」の5段階評価) (2018～2022年度) 当該年度卒業生と次年度1年生との調査による伸び (2023～2027年度) 当該年度卒業生とその1年生時との調査による伸び 「IR 新入生調査」「IR 卒業生調査」	5段階評価のうち、上位2つ (「大変身についた」「やや身についた」)の回答割合(%)の平均の差	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
汎用的能力の獲得状況	入学後の能力変化(表外※参照) (「大きく増えた」～「大きく減った」の5段階評価) 「IR 上級生調査」	5段階評価のうち、上位2つ (A「大きく増えた」、B「増えた」)の回答割合(%)	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
授業外学修時間	授業外時間に、授業課題や準備時間、復習をする時間(一週当たりの平均) 「IR1年生調査、IR 上級生調査」	一週あたり6時間以上の割合	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
授業目的・到達目標の達成度	あなたは、シラバスに示された授業の目的や、到達目標を達成できると思いますか。(「そう思う」～「そう思わない」の5段階評価) 「学修行動と授業に関する調査」	5段階評価のうち、A「そう思う」、B「どちらかというそう思う」の回答割合(%)	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
授業満足度	あなたは、全体としてこの授業に満足していますか。(「そう思う」～「そう思わない」の5段階評価) 「学修行動と授業に関する調査」	5段階評価のうち、A「そう思う」、B「どちらかというそう思う」の回答割合(%)	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
留学等派遣数	協定校への派遣学生数 「国際連携機構資料」	大学間協定に基づく派遣日本人学生数	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
TOEIC/TOEFL等の英語運用能力	SGUの取組みで確認している TOEFL 換算得点目標の達成人数 <参考(学部別目標値)> ■国際: TOEFL 換算 550点 ■文・総政: TOEFL 換算 540点 ■その他: TOEFL 換算 520点 「SGUに関する調査」	左記「TOEFL 換算得点」目標の達成人数(人)	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
学生生活満足度	大学生活を振り返って、学生生活は満足したものでしたか。(「満足」～「不満」の5段階評価) 「IR 卒業1年目調査」	5段階評価のうち、上位2つ (A「満足」、B「そこそこ満足」)の回答割合(%) * 2018年度調査までは、A「とても満足」、B「満足」と回答した比率	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
就職率	就職率 「キャリアセンター統計資料」	就職者数(自営含まず)/就職希望者数	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
大学院進学率	大学院進学率 「キャリアセンター統計資料」	大学院進学者数/学部卒業生数	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開

(※)「知識・技能・能力の獲得状況」の「知識・技能・能力」とは、一般的な教養、論理的思考力、専門分野や学科の知識、グローバルな問題の理解、多様性を尊重する力、主体的に行動する力、リーダーシップ力、人間関係を構築する力、対立する価値を調整する力、地域社会が直面する問題を理解する能力、国民が直面する問題を理解する能力、困難を乗り越える粘り強さ、文章表現の能力、外国語の運用能力、生涯にわたって学び続ける能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、数理的な能力、コンピュータの操作能力、誠実さと品位、時間を効果的に利用する能力、卒業後に就職するための準備の程度、を指す。

(2) 学部独自KPI

KPI	定義	基準	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
グローバル企業への就職率	アメリカ・Interbrand社による Japan's Best Global Brands(40社) Best Global Brands(100社) への就職率	①アメリカ・Interbrand社による Japan's Best Global Brands(40社) +②Best Global Brands(100社) への就職者数/就職希望者数	非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
留学の効果を測定する指標1	国際学部が必須としている留学の効果を数値化 3年生が受検した全学 TOEICと1年次との留学種別ごとの比較 A…交換留学・長期留学 B…中期英語留学 C…その他の留学 D…留学なし	3年生の1年次と3年次の全学 TOEIC スコア(LとRの合計)の留学種別ごと比較(平均値および伸び率)	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
留学の効果を測定する指標2	卒業時の GPA の留学種別ごとの比較 A…交換留学・長期留学 B…中期英語留学 C…その他の留学 D…留学なし	卒業時の最終 GPA の留学種別ごとの平均値	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
留学の効果を測定する指標3	卒業時調査「3. 大学生活で一番力を入れたこと」で留学を選択した学生の、学生生活を通じた教育内容満足度	卒業時調査「3. 大学生活で一番力を入れたこと」で留学を選択した学生の、学生生活を通じた教育内容満足度 「5. 大変満足」を選んだ比率と、国際学部全体の同項目の満足度の比較	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開

(3) 学院全体のKPIに関する指標

KPI	定義	基準	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
入試難易度(偏差値)	ベネッセの進研模試のデータにおける合格可能性 60%以上となる偏差値 高大接続センター		非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
同系列学部勝敗	ベネッセの進研模試のデータにおける同系列学部合格者の競合大学(同志社、立命館、関西)との入学比率 総合企画部	本学と相手校の両方に合格していずれかに入学した受験生のうち、本学に入学した者の比率 本学入学者数/(本学入学者数+併願校入学者数)(%)	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
外国人留学者数	外国人留学生 CIEC 年次報告書	詳細は SGU の定義に準拠	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
ダブルチャレンジ派遣者数	当該年度の卒業生のうち、ダブルチャレンジ制度のアウトチャレンジの単位を取得して卒業した学生数 グローバル化推進本部	①インターナショナルプログラム②ハンズオン・ラーニング・プログラム③副専攻プログラムのいずれかで単位取得し卒業した学生数 ※学部毎は延べ人数	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
卒業後の進路の満足度	卒業後の進路の満足度 (「満足」～「不満」の5段階評価) 卒業時調査	5段階評価のうち「満足」と回答した比率(%)	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
スクールモットーの浸透度	スクールモットー“Mastery for Service”を普段意識する程度は (「常に行動の規範としている」～「全く意識しない」の5段階評価) IR 卒業生調査	5段階評価のうち、A「常に行動の規範としている」または B「ときどき意識している」と回答した割合(%) *2018年度調査までは A「常に行動の規範としている」または B「頻繁に意識している」と回答した比率	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
Well-being 度	現在の自分を取り巻く環境(特定7項目)に対して、あなたはどのように思いますか。 (「そう思う」～「そう思わない」の4段階評価) IR 卒業生調査	「E 時折、収入面が不安になることがある」を除く7項目に対して A「そう思う」、B「どちらかといえばそう思う」と回答した割合の平均値	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開

国際学部実施計画・全体評価

国際学部においては、教育課程にかかわる「学修成果」の KPI は、概ね 2018 年度・2019 年度と比較してほぼ同様である。2021 年度に数値が下がった授業満足度については、対面授業が再開したことによるものか、従来の数値に戻った。一方で、授業外学修時間については、1週間に6時間以上授業外学修をする割合が大幅に増加した状態を維持している。学部教育の主要な柱である留学の派遣者数及び英語運用能力の指標でも高い水準を維持できている。

学生確保の点でも、入試難易度等も現状維持もしくは改善しており、外国人留学生の人数も確保できており、入学後に日本に入国出来ていなかった外国人留学生も、ほぼ入国が果たしている。2020 年度に留学等派遣数は大幅に減少し、2021 年度もまだ低い水準となっていたが、2022 年度はコロナ以前とまではいかないが、かなりの改善を示している。2023 年度の SGU 最終年に向けて、オンライン交流や現地渡航を必須とする研究演習を含め、複数の海外交流科目を実施していく予定である。また、Kwansei コンピテンシーの獲得状況の数値が急落したことについては、原因を探って改善していく必要があると認識している。

なお、2022 年度学生調査の調査報告によると、本学の推奨度(NPS)が、一般的に日本では+になることが顕著に少ない中で、国際学部3年生の数値が+7.7となったことは非常に喜ばしく、是非、この傾向を継続あるいはさらに増加させたいと考えている。


【国際学研究科】中期計画総括シート

提出日：2023年1月23日

責任者	国際学研究科 委員長	担当部局	国際学研究科
-----	---------------	------	--------

1 国際学研究科の理念、目的、各種方針

国際学研究科の理念	変更の有無
本研究科は、多様な文化・価値観が共存する国際社会とそのガバナンス構造の変容に関わる地域的・地球的課題を人文・社会科学的に分析し、解決策を講じることを教育・研究上の理念・目的とし、その課題の解決に貢献することのできる高度な専門的職業人・研究者などの知的人材を育成する。	有・
国際学研究科の目的	変更の有無
多様な文化・価値観が共存する現実の中で、国際社会とそのガバナンス構造の変容に関わる様々な地域的・地球的課題を分析し、解決策を講じるためには、歴史的・地域的に形成されてきた多様な文化・価値観、それに基づく社会ガバナンス構造、そしてその制度的枠組みとの相互作用の中で繰り広げられる経済経営行動を横断的に理解・分析する能力、それに基づいて各課題の解決策を提案・実践する能力、およびそれらの成果を分析・評価する能力をもつ人材が必要である。よって国際学研究科は、多様な文化・価値観が共存する国際社会とそのガバナンス構造の変容に関わる地域的・地球的課題を人文・社会科学的に分析し、解決策を講じることを教育・研究上の理念・目的とし、その課題の解決に貢献することのできる高度な専門的職業人・研究者などの知的人材を育成する。	有・
学位授与方針(DP)	変更の有無
<p>本研究科は、国際学研究科の教育・研究上の理念・目的に基づき、文化、社会・ガバナンス、および経済・経営の3つの専門領域に基づく、2つの地域別研究コース(北米研究およびアジア研究)と、地域間や地域を越えた地球規模の研究を行うグローバル研究コースを設けます。</p> <p>博士課程前期課程においては、3つの専門領域のうち、研究課題との関連性の高い、少なくとも2つの領域を学習し、研究視野を広げることを通じて専門性を高めること、また、国際標準語としての英語総合力、とくに英語による対話力を培います。修士論文作成にあたっては、研究課題周辺の先行研究を十分に踏まえ、既存研究に新たな発見・知見を加え、広く国際社会に発信できるような成果をあげます。</p> <p>博士課程後期課程においては、博士課程前期課程の履修成果をさらに進め、学際的視野をもちつつ、より高度な専門性と研究者としての自立性を確立します。その上でさらに、他の専門領域研究者やフィールドあるいは市民に対して研究課題のフロンティアを周知させ、また、そこからフィードバックを受容することのできる発信力と対話力を身につけた研究者を養成します。</p> <p>本研究科就任予定の専任教員は各々、「国際」を切り口に、文化、社会・ガバナンス、および経済・経営の各領域に含まれる人文・社会科学の様々な専門分野に基づいて研究を行っており、本研究科内にて専門領域を跨る共同研究、研究会などを通じて、研究面での相乗効果が期待できます。</p> <p>学生は、その専門領域を縦軸とし、北米研究コース、アジア研究コースおよびグローバル研究コースを横軸として、横断的、学際的に研究することにより成果をあげます。本研究科では、このような教育・研究アプローチを「国際学」と呼びます。</p> <p>以上の教育・研究から、修士(国際学)(英文名称:Master of Arts in International Studies)、博士(国際学)(英文名称:Doctor of Philosophy in International Studies)の学位を授与します。</p>	有・
教育課程の編成・実施方針(CP)	変更の有無
多様な文化・価値観が共存する現実の中で国際社会とそのガバナンス構造の変容に関わる様々な地域的・地球的課題を分析し、解決策を講じるためには、歴史的・地域的に形成されてきた多様な文化・価値観、それに基づく社会ガバナンス構造、そしてその制度的枠組みとの相互作用の中で繰り広げられる経済経営行動を横断的に理解・分析する能力、それに基づいて各課題の解決策を提案・実践する能力、およびそれらの成果を分析・評価する能力をもつ人材が必要である。そこで本研究科では、文化、社会・ガバナンス、および経済・経営の3つの専門領域を横断する、2つの地域別研究コース(北米研究およびアジア研究)とグローバル研究コースを履修コースとしておく。北米研究コースは、アメリカ、カナダを、アジア研究コースは、日本、中国、アジアNIEs、ASEAN、オセアニアを主な対象地域とし、グローバル研究コースは、地域間や地域を越えた課題を扱う。	有・

<p>学生の受け入れ方針(AP)</p>	<p>変更の有無</p>
<p>国際学研究科(博士課程前期課程)は、多様な文化・価値観が共存する国際社会とそのガバナンス構造の変容に関わる地域的・地球的課題を人文・社会科学的に分析し、解決策を講じることを教育・研究上の理念・目的とし、その課題の解決に貢献することのできる高度な専門的職業人・研究者などの知的人材を育成します。以上を踏まえ、以下のようなアドミッションポリシーの下に優れた学生を選抜します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 国際社会において歴史的・地域的に形成されてきた多様な文化・価値観、それに基づく社会ガバナンス構造、そしてその制度的枠組との相互作用の中で繰り広げられる経済経営行動を横断的に理解することに強い関心を持ち、かつそれを人文・社会科学的に分析する能力をもつ者。 2. 以上の理解と分析能力に基づいて、国際社会とそのガバナンス構造の変容に関わる地域的・地球的課題の解決策を提案し、それを実践する意欲と、それを国際社会で実現するための、高い語学力・対話力・発信力をもつことが期待される者。 3. 文化領域を主な専門領域として希望する場合は、比較文化論、文化人類学、英米文学、哲学・思想を、社会・ガバナンス領域を主な専門領域として希望する場合は、国際関係論、政治学、法学、国際法、国際社会論を、経済・経営領域を主な専門領域として希望する場合は、経済学、経営学、会計学、以上のいずれかを原則として既習している者。 <p>国際学研究科(博士課程後期課程)では、本研究科博士課程前期課程相当の専門領域に関連する基礎的研究に基づき、精緻なリサーチを行って高度かつ独創的な知的分析能力を培い、学問領域や実社会に一層の貢献を行うことができる人材を育成します。以上を踏まえ、以下のようなアドミッションポリシーの下に優れた学生を選抜します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 本研究科博士課程前期課程で習得する内容に関連した修士号あるいは修士課程修了程度の専門知識を有し、本研究科において定められた課程を経て学位論文を提出し、博士号を取得することを目指す者。 2. 専門領域における先行研究を網羅した上で自らの専門的研究に着手し、それを発展させる強い意欲を持ち、専門領域の分野において自立して研究活動を行うことができる高度な研究能力と学際的知識を身につけることを目指す者。 3. 研究成果を内外に発信する能力を有する者。 	<p>有・</p>
<p>学生支援に関する方針</p>	<p>変更の有無</p>
<p>少人数の研究科であるので、まず演習担当教員(指導教員)がアドバイザーとして学生の相談にのり、問題があれば研究科執行部にすぐに連絡をするように努めている。</p> <p>修学支援 春学期が始まって1ヵ月後に、研究科執行部が学生の悩み・不満・要望を聞く機会を設けている。経済学など必要に応じて他の研究科の科目履修を勧める。</p> <p>生活支援 全学共通の奨学金を紹介している。研究科独自の奨学金はないが、学生数が少ないのでベーツ特別支給奨学金など獲得できる確率が高い。教学補佐のアルバイトを提供しているが、これも学生数が少ないので希望者はほぼ全員が採用されている。</p> <p>進路支援 キャリアセンター職員と研究科執行部ならびに演習担当(指導)教員が連携を密にしている。演習担当教員が学生の就職希望について相談に乗る。</p>	<p>有・</p>
<p>教員像</p>	<p>変更の有無</p>
<p>「国際学」は学問分野としての歴史が浅いので、多くの教員は文学、言語学、政治学、法学、会計学、経営学、経済学といった既存の学問分野で学位を持ち、アジア、北米、国際関係を研究対象にしている。しかし、本研究科の教員は既存の学問領域にとらわれず、国際学という学際領域に関心を持ち、専門分野の異なる研究者との協力によって相乗効果が発揮されることが期待される。国際学研究科の理念に基づき自己の研究成果を積極的に国内外で社会に還元することに努め、同時に国際学研究科という組織の発展にも献身的に寄与する。</p>	<p>有・</p>
<p>教員組織の編制方針</p>	<p>変更の有無</p>
<p>博士前期課程は文化領域 8 名、社会・ガバナンス領域 10 名、経済・経営学領域 9 人で、博士後期課程はそれぞれ 1 名、7 名、7 名で構成される。</p>	<p>・無</p>

2. 実施計画

(1) 必須型

実施計画(タイトル)	1-(1)-② 三つのポリシーに基づく教学マネジメントの推進(3ポリシーの見直し・検証、カリキュラム見直し・拡充、カリキュラムマップの整備)			帳票の有無	不要
内容	<p>本学は、大学として「学部の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」(「Kwansei コンピテンシー」)を時代に即して新たに定め、各学部・研究科はそれを土台に「各分野における学位授与に必要な知識・技能」であるDP(ディプロマポリシー)を策定する。このDPは、すべての学生が卒業/修了必要単位数を取得した段階で修得しているべき学修成果を表したものである。この基本原理を守るべく、学部・研究科は(a)DPの再確認(b)DPとCP(カリキュラムポリシー)の整合(c)シラバスの実質化(d)シラバスに沿った成績評価(e)DPとAP(アドミッションポリシー)の連動、を厳格に運用する。</p> <p>本学はこうした学部/研究科による三つのポリシーに基づく教学マネジメントを統括し、大学全体の内部質保証を推進することで、卒業する全ての学生の質を保証する。</p>				
学部独自の取り組み内容	国際学研究科では、学部自己評価委員会、研究科委員会において三つのポリシーの適切性を検証している。また、FD委員会が主体となって、個別に大学院生とのインタビューを持ち、その結果を基に学部自己評価委員会がDPとCPの整合性等を検証している。				
<指標 1>	大学院生のインタビューに出席した人数の割合(大学院生のインタビューに出席した人数/大学院生数)				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標	100%	100%	100%	100%	
実績	25.0%(2/8)	16.7%(1/6)	40%(2/5)		
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標	100%	-(2023 年度に検討)	-(2023 年度に検討)	-(2023 年度に検討)	
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標					
実績					
<指標 3>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標					
実績					
<p>【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】</p> <p>3 つのポリシー(ディプロマ・ポリシー(DP)、カリキュラム・ポリシー(CP)、アドミッション・ポリシー(AP))に関する適切性の確認、DP と CP の整合性等を研究科委員会(4 月 7 日開催)での懇談を経て、研究科として検証を行った。インタビューについて、コロナ禍の中で 2020 年度から Zoom によるオンラインで実施しているが、2020・21 年度の反省を踏まえて学生・院生が集まりやすい日程に変更し、日時を広く設定して自由参加を呼び掛けたが、参加人数は2名であった。指導教員を通じて出席依頼をするなど、今後のために改善が必要である。</p>					

実施計画(タイトル)	8-(2)-① KGI・KPIの設定・活用			帳票の有無	不要
内容	<p>非営利組織である学校のマネジメントにおける最大の課題の一つは、最上位のアウトカム(成果)を定め、その達成度を測るKGIやKPIを設定することにある。学院ではKPIダッシュボード等のツールを活用して「Kwansei Grand Challenge 2039」(超長期ビジョン・長期戦略)および中期総合経営計画(実施計画・基盤計画)の進捗や達成度を含めた成果を検証する仕組みを構築する。そのために、教学・経営両面のデータ活用を司るのに最適な組織体制を確立する。また、各学校および大学の各学部も、全学のKPIと連動しながら個別の状況に合わせて独自にKPIを設定し、毎年その数値や取組状況を評価し、改善・促進の取組みに活用する。</p>				
学部独自の取組み内容					
<指標 1>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	<p>※本帳票の末尾において、学修成果を測定する研究科独自のKGI・KPIを策定しており、これらの指標を用いて毎年度研究科における実施計画・全体の取組みの評価を行っている。</p>				
目標					
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標					
実績					
【2022 年度の進捗状況・今後の取組み】					

実施計画(タイトル)	8-(10)-① 内部質保証体制の確立と運用			帳票の有無	要
内容	<p>本学には、従来から二つの大きなPDCAサイクルが存在していた。一つは中期計画(SGU 含む)であり、もう一つは大学の自己点検・評価および各学校の学校評価である。</p> <p>両者はそれぞれの目的体系を持ちながら重複する部分が多く、業務負担の軽減の観点からも、共通の目的・目標の下で学院・大学全体を見渡した統合的なPDCAサイクルの確立が必須となっている。</p> <p>このため、本学では、2019 年度から各学部／研究科、各学校が本格的に取組を開始する「中期総合経営計画」において、その取組の成果を定期的に測定、評価、改善することを通じて、効率的・効果的なマネジメントの実現を図る。</p>				
学部独自の取り組み内容					
<指標 1>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	※研究科における毎年度の本帳票の作成および学内各種会議体での点検・評価、改善活動などにより、内部質保証システムの PDCA サイクルを確立する。				
目標					
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標					
実績					
【2022 年度の進捗状況・今後の取り組み】					

3. 国際学研究科のKPI

(1) 学修成果に関するKPI

KPI	定義	基準	2018年度		2019年度		2020年度		2021年度		2022年度	
学位授与数 (M・D・P)	修士、博士、修士(専門職)の学位授与数 (※乙号除く) 「大学基礎データ」	授与する学位数が多いほど○ (人)	M	非公開	M	非公開	M	非公開	M	非公開	M	非公開
			D	非公開	D	非公開	D	非公開	D	非公開	D	非公開
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
			M	非公開	M	非公開	M	非公開	M	非公開	M	非公開
			D	非公開	D	非公開	D	非公開	D	非公開	D	非公開
就職・進路決定率 (M)	就職・進路決定率 「キャリアセンター統計資料」	(就職+自営+就労継続)/(修了者 一進学者)	2018年度		2019年度		2020年度		2021年度		2022年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
博士後期課程への進学者数 (M)	進学者数 「キャリアセンター統計資料」		2018年度		2019年度		2020年度		2021年度		2022年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
日本学術振興会 特別研究員数(新規) (D)	特別研究員のうち、当該年度の新規採用者 「研究推進社会連携機構資料」		2018年度		2019年度		2020年度		2021年度		2022年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
研究者輩出数(D) (将来)			2018年度		2019年度		2020年度		2021年度		2022年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	

(2) 研究科独自KPI

KPI	定義	基準	2018年度		2019年度		2020年度		2021年度		2022年度	
授業・カリキュラムの満足度	大学院アンケートによる	「学生による授業評価」アンケート 「大変満足」「やや満足」の割合	非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
学習環境の満足度	大学院アンケートによる	「学生による授業評価」アンケート 「大変満足」「やや満足」の割合	非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	

(3) 学院全体のKPIに関する指標

KPI	定義	基準	現在値(2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度					
卒業後の進路の満足度	卒業後の進路の満足度 (「満足」～「不満」の5段階評価) 卒業時調査	5段階評価のうち「満足」と回答した比率(%)	/	/	/	/	非公開					
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
			非公開		非公開		非公開		非公開		非公開	
Well-being度	現在の自分を取り巻く環境(特定7項目)に対して、あなたはどのように思いますか。 (「そう思う」～「そう思わない」の4段階評価) IR卒業生調査	「E 時折、収入面が不安になることがある」を除く7項目に対して A「そう思う」、 B「どちらかといえばそう思う」と回答した割合の平均値	現在値(2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度					
			/	/	/	/	非公開					
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度		2027年度	
非公開		非公開		非公開		非公開		非公開				

国際学研究科実施計画・全体評価

まだ歴史の浅い研究科であるが、少人数による教育で成果をあげるように努力している。2021年度の修士学位授与者が2名で、今年度も同数もしくはそれ以上を見込んでいる。しかしながら、進学者数が年度により上下しているため、安定的な確保に心掛けたい。

課程博士学位授与者を2018年度、2019年度、2021年度に各1名ずつ輩出しているが、うち2名が高等教育機関に就職が決定しているなど、着実な成果を上げている。博士後期課程のコースワークも定められたので、今後の成果を期待している。

なお、2021年度の課程博士授与者は、ミャンマーからの留学生であり、2022年度は本学部の非常勤講師を務めた。